
僕と彼女とあたしと彼

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女とあたしと彼

【Nコード】

N0359C

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

僕の初恋の相手は年上だった。告白するつもりは無かったのだけど……。彼は突然好きだとあたしに言った。あたしが初恋ってありえない……。 (長編ですが1話完結方式です。あと視点が1話ごとに変わります)。

その1

「僕は好きですよ」

彼女が珍しく、自分の事を卑下するような言葉を言ったので、つい言う予定の無かった言葉が僕の口から漏れた。

「なに？同情？」

「一応、本気ですけど」

「いちおう？」

「すみませんね。こういう気持ちは初めてなもので」

「それってあたしが初恋って事」

「そうですか」

「ふゝん。初恋って実らないものだよね」

「そんな事も言いますね……」

これはふられたって事かな？

自分でも良くわからないが、特にショックを受けなかった。

「えゝ自分の事卑下する言葉は言わない方が良いですよ」

「なんで？」

「言葉には力が有るので、本当の事になりますから」

「でも、あたしは自分の事嫌い」

彼女の目を見て僕が言う。

「僕が生まれてきてから、たぶん何百人か会った女の人で、初めて好きになった人なんですよ。もう少し自信持って下さい」

「……」

「……」

彼女が目をそらしつつぼそりと言う。

「そっか」

「そうです」

「あのさ、あたしのどこが良いわけ？」

「……わ、わからないです」

「あっそ」

「本気ですよ」

彼女が急に近づいてくる。僕の目の前に顔が……ち、近い。僕が戸惑っていると、胸にそっと手を置かれた。

ふっと笑って彼女が言う。

「大丈夫？」

大丈夫なはずがない、この人は何をしているんだ！？
顔が熱い、確実に顔が赤くなっている事だろう。

そして、彼女が何かを堪えるよう僕から離れると……。

「つくく、あはは」

なぜか爆笑された。

「……」

笑い終わると彼女が言った。

「あゝ笑った、笑った」

「酷いですね」

「ん」と、お礼になんか一つだけお願い聞いてあげる」

「お礼？ 別に何もしてないですけど」

「いいから、何か無いの！！」

「じゃあ、手を繋いで下さい」

「は？」

「ダメですかね？」

「そんなんで良いの」

「良いです」

彼女が手を差し出す。僕はそっと手を繋いだ。

「その嬉しそうな笑顔は反則」

「え？」

「なんか趣味が変わりそう」

「……」

その2

「いいかげん離れてよ」

「い、嫌です」

何であたしはこんな子と一緒に居るんだろ？

突然好きと言われるまで全く彼の気持ちには気付かなかった。

言われた後も彼の態度は何も変わらないし……。

でも、さっきから急に態度が変わって、あたしにしがみついている。

ピカリと窓から光が差す。そしてすぐに轟音が部屋の中に響いた。

「今のは結構近かったね」

「で、ですね」

「あのさ」

「なんですか」

必死な顔をしているので笑いそうになる。そんなに怖いのか。

「何笑ってんですか！」

「あゝ悪い」

彼につっこまれた顔に出てたらしい。

「この前は近づいたら心臓が痛い事になってたけど、今は平気なの？」

あたしは、この前の事を思い出して、また笑いそうになる。

「あゝうん……あ、今わかったかも」

ふわりと笑って彼が言った。

「え？」

「好きなところです」

「……」

「そうやって強がってる所が好きなのかも」

彼の言葉にビックリした。そして、少し力が抜けた。

「……」

「僕はあなたを少しでも助けたいです」

「何言ってるんだか」

「んゝこんな格好だと説得力無いですかね……」

あ、また光った。そして少し遅れて音が鳴る。

さっきより遠くなったようだ。

「あたしこの音苦手なんだ」

「僕ですよ」

「でも、こうすれば平気かも」

あたしはそつと彼に抱きついた。彼がビククリして逃げようとする。

「あ、逃げるな」

ぴたりと彼の動きが止まる。彼の心臓の鼓動を感じた。

また笑いそうになる、何であたしなんかにそんなにドキドキしてるのかな？

そう、そして、何であたしはこんなにドキドキしているんだろう？

同じように鳴っている心臓の音は彼に届いただろうか……。

その3

「ぼくたちって付き合ってるんですかね？」

「あゝどうだろうね」

何となく勢いで、僕は彼女に自分の気持ちを伝えたのだけど、彼女の態度は特に変わらなかった。

でも、つい最近、という理由なのか彼女から抱きついてきた時があった……頭が真っ白になって記憶があやふやなのに、彼女の心臓の音だけはハッキリ覚えている。

僕たちが変わった事といえば、仕事が終わった後に、一緒に食事するようになった事だけかな。

食後に何となく疑問を口に出したら、合間な返事が返ってきた。

「そうですね」

「今のままじゃダメ？」

彼女が不安そうに言った……ビククリした。

彼女は人に弱い所を見せるのを嫌う人だったから。

「ダメじゃないですが」

「が？」

「良くわからないですよね」

「……」

「人を好きになるのが初めてだから」

「あゝそうだったっけ」

「うん。だから、今幸せですよ」

「は？」

「あなたは僕の気持ちを拒絶しなかったし」

「でも、受け入れ「わかってますよ」」

彼女が苦しそうに言うから、僕は遮って言葉を言ってしまった。

「そう」

「絶対嫌いになりませんから」

「なにそれ？」

「なんでしょうね。何か言ってしまいました」

「そう」

「どれくらいかわかりませんが、今の感じでいきましょう」

「ありがとうございます」

「今日は素直ですね」

「今日は？」

「んゝそうですね。最近、僕の前だと素直ですね」

少し照れたように顔を伏せた彼女を愛おしく感じた。

その4

彼の言葉に凄く動揺してしまった。怖かった。

彼との関係を何かの形にしまったら、壊れてしまうんじゃないかって……。

彼の真っ直ぐな気持ちを受け止める自信が無い、強がっているあたしが好きなだと言われて、少しだけほっとしたけど、あたしの幻想を好きなんじゃないかと、どうしても思ってしまう、彼はあたしの事をちゃんと見ているのかな……。

だってさ初恋があたしってありえない!!

あたしの不安を感じたように彼が言う。

「絶対嫌いになりませんから」

好きだと言われるより、何だか嬉しかった。

「はあ」

「どうかしました？」

「きみの鈍さに呆れたの」

「そうですか……」

ただたんに私が怖がってるだけで、周りから見たら付き合ってるように見えてると思う。

そして、君の前だと、力抜けてますよ。動揺したり、不安になったりしてるのは、あたしの方だよ。

何でこんなに弱気になってるんだろ、あたしらしくないな、そう思うとつい自分に対して苦笑してしまう。

彼があたしの表情の変化に気付いたのか話しかけてきた。

「どうかしました？」

「どうもしてない」

「ならいいですけど」

「あのさ、前から気になってたんだけど、仕事以外は敬語じゃなくても良いよ」

「癖です。何か抜けなくて……」

「まあ、無理にとは言わないよ」

「直す方向でいきます」

いや……直す方向にいつてないよそれ！！ 口に出したら、いつまでもこの話題になってしまいそうだし、心の中でツツコム。

あたしが黙った事で、急に2人の空間が静かになった。でも、沈黙が苦にならない。

どちらからとはいわず、そっと手を繋ぐで、あたしたちは、暫く何も喋らず過ごした。

ただただ、ず〜とこうしていたいと思った。

その5（前書き）

その4に続き、彼女視点です。

その5

「はぁ」

あたしは勢いよくため息を吐いた。

「疲れてますね」

「あーうん……何で嬉しそうなの？」

「え？」

「あたしが疲れてると嬉しいの？」

イライラをぶつけるように言ってしまった。でも、彼はさらりと受け流すように言う。

「良くわからないけど、普段無理して元気出してんじゃないかって何となく思っんですよね」

「それで？」

「だから、僕の前だと無理してない感じがして嬉しいのかも」

「そっか」

彼がおもむろに私の手を握る。

「何してんの？」

「気を送ってます」

「あっそ」

「元気でしたか？」

「んーきみの方が元気になった気がする」

「た、確かに……」

「だよね。嬉しそうなもの……」

「どうかした？」

彼が少しまじめな顔になって、なにやら考えている。

「……好きですよ」

「え？」

何突然言ってるかな？ この子は……。

「今日はもう言いません」

「う、うん」

あたしが彼の言葉に戸惑っている、突然抱きしめられた。そして、優しく頭を撫でられる。体の力が自然と抜けた。うわーやばい……。

あゝほんと、彼の言動と行動が予想つかない、まあ、良い意味で予想を裏切るのだけど……。

「元気分けてみました」

にっこり笑って彼がそう言くと、あたしから離れようとする。

あたしが咄嗟に言う。

「足りない！」

「え！　じゃあもう少しこうしてますか？」

あたしは、返事の代わりに力を抜いて体を預けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0359c/>

僕と彼女とあたしと彼

2010年10月8日15時47分発行